都市における母子保健サービスの検討

研究協力者　井澤　方宏（川崎市衛生局保健部）
共同研究者　久保　秀史（元上智大学教授）
宇留野勝正（共立医療秘書専門学校）
小泉　　宏，長原　慶子（幸保健所）
渡辺　嘉彦，沖　ミチヨ，益子　マリ（中原保健所）
青山　三男，杉浦　芳子，萩庭　芳枝（多摩保健所）
赤間　静子，橋本　怜子（麻生保健所）

はじめに

都市における母子保健をとりまく状況は，地域社会の連帯性の稀薄，核家族化による家族機能の減退，高層集合住宅等閉鎖された居住空間，プライバシーを尊重する風潮に加え，生育過程の中で生活体験や人間関係体験の乏しい父母が増加するなど，社会環境的に育児不安を増大する要因が多く，従来の保健指標では計ることの出来ない母子保健の課題が生じている。今年度は都市の母子保健問題と相談機能のあり方の見直しを図り，既存の資料の整理，分析を行うとともに，母親同志の交流の場の確保，都市におけるボランティア組織の育成などについて検討した。

1．川崎市の特徴

川崎市は東京と横浜に隣接する人口110.6 万人の政令指定都市で，工業都市として発展してきた市南部地区（川崎区，幸区，中原区）と東京のベッドタウンとして都市化の進行した市北部地区（高津区，宮前区，多摩区，麻生区）に大別される。昭和61年10月１日現在の人口構成比は15歳未満の年少人口19.5%，65歳以上の老年人口7.1 %と若く，全国平均に比較し，婚姻率，出生率共に上回っている。一世帯あたりの家族構成は2.7 人と核家族化の傾向が著しい。南部の母子保健指標は11大都市中最も悪い大阪市のパターンに類似しており，北部地域は，保健指標が極めて良好な地域である。母親の就業状況，乳幼児の保育施設入所率，生活保護率は南部に高く，高学歴者，母親学級受講予定者は，北部に高い。経済面，教育面，健康意識面で南北格差が認められる。

2．母子保健サービスの現状

本市の母子保健サービスは市内９保健所を中心に，市内医療機関等の協力を得て実施している。

(1) 母性保健サービス：本市の母性保健事業の核となるものは，思春期の保健相談及び講座，母子健康手帳交付，母親学級，妊産婦健康診査及び産後健診である。母親学級は初妊婦を対象に実施しているが，生涯健康教育の出発点として又，母性意識や主体的な育児姿勢を育てる場として重要な位置を占めている。核家族や居住歴の浅い孤立した妊婦が多いことから，夫への働きかけや仲間づくりを意図した学級運営が求められている。産後健診は出産後の母親の健康確認と妊娠中毒症後遺症対策等の要となっている。女性コーナーは前述のサービスを補完し母性の生涯にわたる保健問題

に対応する場として，思春期から産後の異常，家族計画，更年期等の幅広い相談に当たっている。

(2) 乳幼児保健サービス：乳幼児期の定期健康診査は3ヶ月児，10ヶ月児，1歳6ヶ月児，3歳児，4歳児，5歳児の計6回実施している。又，特殊健康診査として，先天性代謝異常，神経芽細胞腫検査，視聴覚検診を実施している。図1は乳幼児定期健康診査事後指導の体系図である。各健康診査のスクリーニングをうけて，身体発育面では，乳幼児特別相談と療育相談でフオローしている。又，育児上の問題を中心とした母親への援助の場として，母子コーナーや赤ちゃん相談の場を設けている。母子コーナーは，小児保健各サービスと連携し，一貫したものにするための重要な役割を果たしている。ちびっ子健康教室は，日常生活習慣が確立する幼児期に母と子が（親子体操等の）体験学習を通じ積極的な健康づくりを学ぶ場として位置づけている。友達がいない子や友達と遊べない子については，市内の保育園で実施している保育相談に紹介している。

3．モデル事業の実施

母親学級受講者の生活実態をみると，居住歴1－2年未満の専業主婦が多く，結婚，転居，妊娠，退職など，生活や人間関係の急激な変化に対応しきれず戸惑いを感じている。夫の帰宅時間は遅く自由な時間は多いにもかかわらず，住宅構造の高層化に加え，プライバシーを尊重する風潮等，近隣との交流がもちにくい状況にある。

乳幼児健診の受診率は高く，発育も良好で身体的には特記すべき問題は少ない反面，友達がいない，遊べない，言葉が遅い，肥満等母親のかかわり方に起因する問題が増加している。こうした状況を踏まえて住民自身が自ら気づいて，よりよい育児環境づくりができるように「地域の中で，母親の育児力を高めるための仲間づくり」を目指して，次の4保健所でモデル事業を計画し実施した。

1. 幸保健所

(1) 母親学級の検討とグループ作り：母性意識を育て，健康な子を産み育てる為に日常生活を振り返り，お産にむけて積極的に準備できるよう，受講生相互の仲間意識を育てることを意図した母親学級を行い，現在3っの自主的グループが芽生えている。(17 回延289 人)

(2) 父親教室へのとり組：社会教育との連携の下に，育児に対して父親にも積極的に参加，協力してもらうことを目指し夫婦で出席する父親教室を6回試みた(48 組参加)

(3) 新設団地での子育てグループの育成：工場移転跡地に出来つつある都市再開発による新設団地で若い世帯が多い。又，建築構造上オートロックシステムを採用しており孤立化しやすい状態にある。乳幼児をかかえた母親を対象に，子育てグループを作り働らきかけた結果，幼児と乳児の2っの自主的グループが生まれた。(乳児グループ 8回延184 人，幼児グループ 3回90人)

2. 中原保健所

(1) 仲間づくりをめざした母親学級の検討：妊婦同志のつながりを強化するため，グループ学習と体験学習に重点をおいた学級運営を行った。三日間の基礎コースに加え，妊産婦体操，沐浴実習のメニュー方式の体験学習をこころみたところ，次第に希望者が増加しリーダーを中心に2っの自主

グループが誕生した。対象の選択，自主グループのかかわり方，分娩予定の医療機関との連携等が今後の課題である。（22回600 人参加）

(2) 母親グループ交流会：妊娠中の不安を軽減し，積極的で望ましい育児姿勢づくりをめざし，身近な体験者の話を聞きながら妊婦と産婦の情報交換，交流の場を設け地域の中での育児仲間づくりを試みた。(4回，23人参加)

3.多摩保健所

(1) 地域子育てグループの育成：母親の孤立から生じている問題を個別相談で解決するには限界があり母と子の遊びを中心としたグループ育成と地域への発展を目指したはたらきかけを行った結果，４っの教室と11の自主グループがうまれ，小地域単位での子育てグループへと発展している。

（67 回223 組2,011 人参加）

(2) 母親学級の検討とグループづくり：母親の孤立化を防ぐには妊娠中から参加者と交流できる場面を意図的につくっておくことが望ましい。(1) の経験を基本に据えて仲間づくりを意図的にはたらきかけた学級運営を工夫した結果，終了後希望者による「呼吸法教室」や「手作り肌着教室」が生まれ，体験を通して主体的にお産に立ち向かう姿勢や仲間づくりの輪が拡がっている。（18回，332 人参加）(3) 育児ボランテイアの育成：(2) の「手作り肌着教室」には地域のボランテイアの協力のもとに，家庭的雰囲気の中で住民自らがよい育児環境を主体的に行うことをめざした育児ボランテイア育成を試みている。

4.麻生保健所

(1) 母と子の健康づくりをめざし，親が教室参加をきっかけに子供の発達を理解し，親子関係の大切さ他の親子との交流の大切さを学び，地域の中で仲間づくりができるよう現在保健所で実施している「ちびっ子健康教室」のカリキュラムを検討し，効果的な学習内容について検討した。次年度は，実施状況の分析と評価に向け検討を続けていきたい。（27回698 人参加）

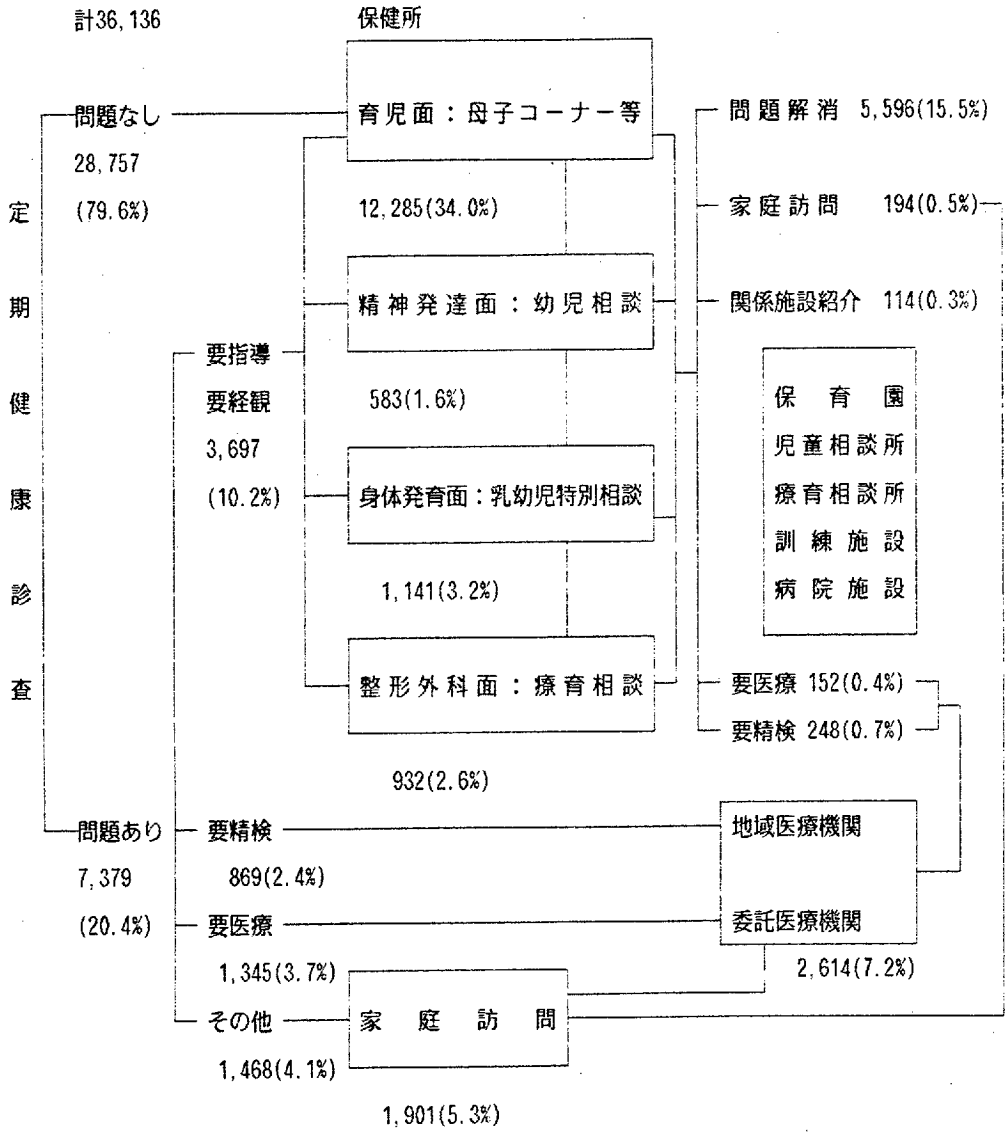
(2) 団地の子育て教室：都市のベッドタウンに当る団地の中で未就園児を対象に子育てを地域ぐるみですすめていくために月１回遊びの教室を実施，母親同志のつながりが深まり老人会との交流も始まった。（11回87組853 人）

まとめ

１．今年度は川崎市の地域特性について既存資料を基に分析をこころみたた。，今後は更に母子の生活実態等母子をとりまく都市の特徴的問題の実態把握につとめたい。

２．４っのモデル保健所において，母親の育児力を高めるための仲間づくりをめざした母と子の触れ合いの場やボランティア育成について実践活動に入ったが，今後は更に活動の拡がりを深め評価を行っていきたい。

図１．乳幼児定期健康診査における事後指導の状況（６０年度）



＊必要に応じ相互の場面で重複して対応しているものがある。

乳幼児定期健康診査（保健所実施分）

	対象者数	受診者	率
３ヵ月児	13,945	13,291	95.3
1歳6ヵ月児	14,028	11,266	80.3
３歳児	13,600	11,579	85.1
計	41,573	36,136	86.9

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

都市における母子保健をとりまく状況は,地域社会の連帯性の稀薄,核家族化による家族機能の減退,高層集合住宅等閉鎖された居住空間,プライバシーを尊重する風潮に加え,生育過程の中で生活体験や人間関係体験の乏しい父母が増加するなど.社会環境的に育児不安を増大する要因が多く,従来の保健指標では計ることの出来ない母子保健の課題が生じている。今年度は都市の母子保健問題と相談機能のあり方の見直しを図り,既存の資料の整理,分析を行うとともに,母親同志の交流の場の確保, 都市におけるボランティア粗織の育成などについて検討した。